

「花の百名山」取材の裏話

話が違うでしょ

NHK・BSⅡの「花の百名山」を制作している「ウォーク」という会社から電話がかかってきたのは、昨年の8月10日ころであったと思う。盆過ぎに白山を取材したいが、どんな花が見られるか？というので、「ハクサントリカブト・・・」などと答えた。翌日、職場にまた電話があり、同行してくれないかという。わずか5日間の夏休みは残り2日、予定外の休みは取りづらかったが、頼み込まれ、承諾してしまった。後で聞いたところでは、白山自然保護センターにも頼んだが都合がつかなかったそうで、期日も迫っており、相手も必死だったのだろう。日は16～17日と決まっていたが、14日になっても詳しい案内がない。仕方がないので、こちらから日程・コース、見られる花などを書いてFAXで送ったところ、担当者は出張しているという。人にものを頼んでおいて何といい加減など思いつつ、よく話を聞くうち、番組を見たこともない私は、たいへんな役を引き受けたことを知った。「単なる案内ではなくゲストとして”出演”していただきたいのです。担当者からそうお聞きになっていませんか？」

ディレクターは呑んだくれ

15日、仕事を終えて、集合場所の市ノ瀬・永井旅館にかけつけた。36才のディレクターに、カメラマン、音声担当、若いアルバイトの4人が食事をしており、私も加わる。ビールを少し飲んで、明日のコースや花のことを説明するが、どことなくうわの空。そのうちディレクターは焼酎を飲みだし、「梅さんは酒もタバコも飲まれるんですか。よかった。」ほかの山で、酒もタバコも飲まない”学者”のゲストがけっこう多く、やりにくかったとのこと。こちらは、変なところを評価されたようで複雑な気持ち。食事後に部屋で打合せと聞いていたので、こちらから催促して部屋に引き上げたが、もう呂律も回らぬような状態で例の「よかった」を繰り返すばかり。とても打合せどころではなく、明日が不安になる。酒の弱い男だと思ったが、風呂でカメラマンが言った。「4時ごろ旅館に着いて、ブランディーを1本空けているんですよ。酔うといつもあれで、すいません。」

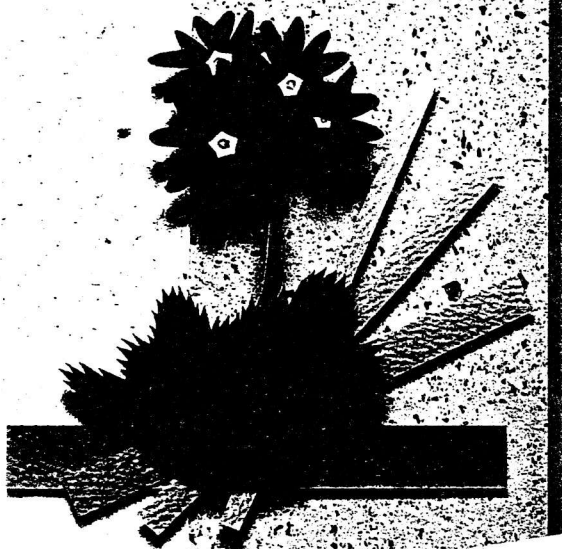
花は取り合い

16日、天気予報は午後から雨。早く高山帯へと焦るが、あちこちでカメラを回し、どうでもいい花まで撮る。やはり、昨夜のレクチャーは無駄だった。酒臭いディレクターはしかし、元気いっぱい。日本山岳会に入るつもりだという。ようやく南竜道との分岐に着いたが、肝心のハクサントリカブトは咲いておらず、雨まで降ってくる始末。アルバイトの学生はTシャツ1枚で装備は皆無。黒いビニール袋を着て？木陰で震えている。結局、彼は室堂で熱を出し、診療所のお世話になった。翌日、御来光は無理ながらもまずまずの天候。クロユリやハクサンコザクラも何とか咲いていた。白山を象徴する花といえば、やはりこれらの花がいいと進言したのだが、すでに他の山のメインとして使われているという。日本百名山と違い、花は取材できる時期に限られる。複数のチームでこなしているのだが、各山のメインの花は、取り合いとなり、いわば早いもの勝ち。結局、白山はハクサンシャジンでいくことにした。観光新道の「馬のたてがみ」付近、「ありました、ありました」などと言いつつ、居もしない人に向かって花の説明ができるほどこちらは役者ではない。おまけに、前もってインタビューの内容は聞いてはいたものの、いきなり「梅さんにとって花とは何ですか？」などという問いには絶句……。しどろもどろになったこの場面は、一部音声のみに編集されていたのがせめてもの救いであった。夕方、永井旅館に戻るやいなやビールを飲むディレクター。いわく「僕のやり方は、台本なし。その場の印象で決めていくんです。」

(19期 梅 典雅)

白山 HAKUSAN ALPINE FLOWERS GUIDE 花ガイド

文・写真/梶 典雅



KAKUBUNDO

あとがき

春から秋の花が一斉に咲きそろう夏の白山。それは、可憐な花たちが競演する舞台といえるのかもしれませんが。鑑賞の仕方はそれぞれでしょうが、ゆっくりと自然の造形の妙にふれ、その名を覚えれば、山登りの楽しみもひとつ増えるのではないかと思います。

そのような目的で制作した「白山の花ガイドブック」も、発行以来8年を経過しました。この間、いくつかのご意見をお聞きし、改訂の必要も感じていました。今回、一部の写真を除き、全面的に内容を改め新版としました。もとより、本書の存在価値は、白山と周辺の山で見られる花だけを扱ったことと、思い切ったポケットサイズにしたことにあると思います。できるだけ写真を大きく、掲載種数も多くして、かつコンパクトなものにしたいという相反する条件のなかで、以前のものより縦に少し長くし、ページ数・種類数とも2割ほど増やすことで改善を図りました。

また、和名に漢字表記を添え、可能な限りその意味を解説しようとしたのは、その花により親しみを感じていただけるのではないかと考えたからです。その反面、形態や生態に関する記述をあえて最小限にとどめたのは、スペースの関係もありますが、ガイドブックとしての機能に徹したということをご理解願いたいと思います。

筆者の浅学非才ゆえ、至らぬ点もあると思いますが、本書が多くの方に利用され、白山を愛する人が一人でも増えるならば、これに勝る幸せはありません。

最後になりましたが、元金大理学部教授の里見信生氏、金大理学部教授の清水建美氏、並びに元白山自然保護センター所長の米山競一氏には、数々の御教示を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

1998年5月17日 著者

子供の頃、山に行くと言うと熊が出るからやめろと母によく言われた。その後百数十回山に登って、熊に出会ったのはたった二回である。昔はともかく、最近は熊の数もかなり減ってきているらしい。数年前の秋、九州の祖母山に一人で登った時、渓谷沿いの鬱蒼とした、今にも熊が出そうな林の中をドキドキしながら歩いたことがあった。帰ってから友人に「九州にはもう熊はおらんよ」と言われて拍子抜けをしてしまった。実際、絶滅したかどうかは解らないが、長年熊は目撃されておらず、もし祖母山で熊に会っていれば特ダネのものであった。熊（ツキノワグマ）は十数km四方にも及ぶエリアを移動し、ドングリやブナの実、ウドやザゼンソウの葉などを食べて生活している。また、まとまった生息域の中に最低七、八十頭いないと子孫を残していくことは難しいと言われている。開発の波が里山から奥山へと及ぶに連れて、森林は道路などによって分断され細分化されてきた。そうなれば相対的に面積の小さい九州や四国では熊が絶滅の危機に瀕しても不思議なことではないと思う。

熊に会った二回の内の一回、それは尋常な出会いではなかった。またそれは悲しい出会いでもあった。平成元年のゴールデンウィーク、富山、石川、岐阜、三県境にある笈ヶ岳に登った時のことだ。この山には登山道というものがないので、無雪期は猛烈な藪漕ぎを強いられ、自ずとこの時期に登ることになる。雪が良く締まっているので、カンジキも山スキーも要らず、つぼ足で十分だ。この時期は熊にとっては受難の季節となる。冬眠から目覚めて間もない熊の胆嚢には胆汁がたっぷり溜まっていて、それを目当てに歩き易い雪の上を猟師が入ってくるからだ。この時の山行は猟師小屋に泊めてもらったので、文句を言える義理でも無いのだが、感じたことを少し書こうと思う。

二日目の朝、私たちは笈ヶ岳をめざし、猟師連中はライフル銃を担いで熊打へと小屋をあとにした。陽光を浴びて輝く雪面を一步一步高みへと登っていく。紺青の空とブナの白い木肌のコントラストが何とも言えず美しい。膨らみかけた冬芽がほんのりと赤味をさして、周りの空気までが薄赤く霞んで見える。頂上への稜線に達した時、谷間からパーンという音が発し、辺りの稜線へと響きわたった。続いて二発、三発。銃声は山の張りつめた空気を掻き回すように谷間から稜線へと駆け登り、再び谷間へと消えていった。「ああ、ついに見つかってしまったか！ 当たるなよ！ 当たるなよ！」とこの時私は心の中で祈っていた。それは一つには無意な殺生であるように思えたこと、もう一つは今晚熊を食べる羽目になるからであった。

雪山とは言え日差しは強い。頂上での昼の宴が終わる頃には、張りつめていた空気もすっかり緩んで遠くが霞んで見える。どこからか飛んできたホシガラスがオオシラビソの梢に留まっている。フイフイフイとゴジュウカラのさえずり。春を感じながら、緩みきった雪の斜面を気ままに駆け下った。主稜線から派生する小さな尾根の末端に建つ熊打ち小屋に着いた時、もう猟師達は戻っていた。小屋に入るとストーブの上に、祭の夜店で売っている水の入ったヨーヨーのような物が三つ吊るしてあった。はて？ と近寄ってしげしげと眺めると、くすんだ緑色をしたそれは風船よりももっとしなやかで、触れると破れてしまいそうな程の薄い膜でできていた。それは初めて見る熊の胆嚢だった。乾燥すると小さくなってしまうが、内容物は「くまのい」として数十万円で売れるそうだ。手招きされて土間から畳に上がると、テーブルの上に横の畑から取ってきたばかりのわさびが摺りおろしてあり、その隣の皿には肝臓の刺身が圧倒的ボリュームで食べられるのを待っていた。下手物好きの友人はさっそく興味を示していたが、私は頭の中が混乱していた。誘われるままに肝臓の前に座ったものの手を出せないでいると、「うまいぞ！ さあ！」と催促。喰わず嫌いと思

われるのも頼なので、思い切って口に入れる。「どうや！うまいやろ！」。息もせずに飲み込んだ私は一宿一飯の恩義もあって、顔を引きつけて頷くだけであった。その日は肉よりも専ら内臓が食卓にのぼった。取れた三頭の熊はその場で皮を剥ぎ解体されたが、時間がなかったので腐り易い内臓だけを取り出して雪の中に埋めてきたそうだ。私にとっては悲惨な晩餐だったが、熊肉とイラクサの入ったラーメンだけは美味しいと思った。

陽が落ちて雪深い谷間にはたちまち厳冬のような寒さが戻ってきたが、小屋の中はストーブと宴の熱気で頬が火照るくらいに暖かい。今日の獲物の話に花が咲く。冬眠から目覚めた熊は食糧を求めて急斜面の雪崩の跡に姿を現すという。雪崩で剥き出しになった地面に新芽や昨年の木ノ実が残っているからだそうだ。猟師達はそういう場所を「なばた」と呼んでいた。雌熊は冬眠期間中に出産と子育てをするので、この時期は子連れも多い。母熊と二頭の子連れは「みつびし」、単独の熊は「いちこ」。これも業界用語である。今日取ったうちの一頭は「みつびし」の母熊だった。猟師達は子熊が独立して生きていける大きさと判断したうえで、母熊に銃口を向けたのだった。雪面を血で赤く染めて横たわる母熊の傍らで、子熊は「お母さんどうしたの！」と言いたげに、キョトンとした顔付きで寄り添っていたという。私は胸が詰まる思いだった。その気持ちを察するように老練な猟師は言った。「わしらは遊びや金儲けで熊を取っとるんやない。これがわしらの伝統なんや。」確かに彼らは祖父や村の長老達がやってきたことを受け継いでいるだけかもしれない。結果的に「くまのい」や毛皮が現金になることは否めないが、むしろ自然の一員として天敵の無い熊を淘汰することを本分としてきたのだろう。それが猟師の伝統ということなのかと私は思った。私はこの話を聞くまで猟師達にいささかの反感を抱いていた。しかし熊が減って希少種となった今、害獣駆除という名目でしか伝統を守ることができない彼らも、また被害者な

のかもしれない。

早朝の空は白々としていて、雲のようにも青空のようにも見えた。ピンと張りつめた谷間の空気だけが今日の天気をものがたっている。昨夜の熱気に満ちた宴の様子が夢うつつのように頭の中にこびりついていて。今日は猟師達と一緒に山を降りる日である。猟師小屋は奥深い山懐の、偶然に開けたような平坦地の端に建っていた。雪解け水がわさび畑を通り抜け、サワグルミとトチノキの間を縫ってさらさらと流れていく。この平坦地を通り抜けた流れは幾つもの小滝となって深い峡谷の底に落ちていた。昨日取った三頭の熊は二十kgくらいの肉の塊に分けられ、ビニール袋に包まれていた。その一つを自分のザックに入れて歩き出す。峡谷の中腹に付けられた細い踏跡を辿りながら、今背負っている肉の塊が昨日までは我が子とともに多分幸せに生活していたであろうことを思うと、生命の空しさ、人間の傲慢さを感じずにはいられなかった。

峡谷を抜け里が近くなると、山は本当に穏やかな表情になる。ブナの新緑は目に滲みるように美しい。ヒメアオキ、エゾユズリハ、アカミノイヌツゲ、ハイイヌガヤ、厳しい冬を雪の下で凌いできた常緑低木が、解放されて陽光を一身に浴びている。こんな時、山の厳しさと同時に人里の暖かさ、有り難さがしみじみとわかる。普段、当たり前のようにして過ごしている生活が、どれほど恵まれたものであったことか。そして恵まれすぎた現代社会は己のことしか考えない人間の傲慢と無知の所産ではなかったかなどと考えながら、猟師の村へと歩を進めた。ミズナラの林、カタクリの可憐な花、ホオジロのさえずり「自然もまだ捨てたものではないな」と気を取り直し、村へ着く頃にはいつものように心地良い疲労と満足感が体を満たしていた。



「ワングルは何故衰退（部員減少）したのか」に疑問あり

21期 山口 克己

「やまざと」4号の後半46ページに文芸作品掲載の解説の中で、「ワングル衰退」の原因なるものにさらりと触れられています。

部員減少＝衰退とするところに議論の余地があるようにも思いますが、それはさておき、また、某女史（原文のまま）と久富氏との議論は既に和解しているということですが、関係者の一人として一言言わせて下さい。

某女史（原文のまま）の解析・考察によれば、衰退の原因は執行部の任期が変更されたことにあり、その有力な証拠として、前田先生の言葉を取り上げてあります。曰く、「あんたらがシステムを変えたから上級生が出てこんようになって、活力がなくなってしまったんや」と。

果たして本当にそうなのでしょうか。

部員数は20期をピークに減少し始めたと解析されていますが、少なくともOB会名簿を見る限りでは、各期の部員数は15人程度で、特異的に20人を超えるような期がいくつかあり、各期の部員数が10人前後になったのは最近のことのようです。また、私の記憶では私が現役の頃の4年生でさえ、3年生までに比べれば元々足が遠のきやすかったように思いますが、皆さんは如何だったのでしょうか。

久富氏のコメントでは、20期が任期を変更したようになっていますが、栄えある金大ワングル執行部を僅か半

年で次期執行部に引き継いだのは21期であり、予定より半年も早く執行部を任されたのは22期です。現役当時「体育会系の部にしては議論が多い部だ」と思っていました、21期はもちろんのこと、22期・23期にも任期変更についての議論をお願いしました。その結果、昭和54年4月に3年生執行部へ移行した時も、4年生が完全にワングルの第一線から退くのではなく、リーダー会議長・パーワン審議会議長をはじめとして数名の4年生が任期変更前と同じように両会議のメンバーとして残るような制度にしました。また、数年後には任期変更について見直しをしてもらうようにベルクハイム誌の中にも書き残しておきました。残念ながら見直しが実施されたかどうかは定かではありません。

当時良かれと思ってやったことですが、結果が思わしくなかったのであれば批判されて当然ですし、久富氏も仰っているように現役の方々がやりやすいように改められるべきだし、真に部員減少の原因がそこにあるのなら、是非とも改善して下さい。やはり、いきいきと活動しておられる方が望ましいと思います。

言い訳じみた話になってしまい恐縮です。ただ、「ワングルをあなた達が勝手にいじったから、ワングルが衰退したんだ。あなた達が悪い」と言われているのも同然ですが、そう言われるのならまだしも、「解析・考察」の名の下に21・22期をはじめとする関係各期に「汚名」を着せられるのはご容赦願いたいと思います。

前稿への答弁

某女史こと

15期 舟田 節子

山口さんの原稿は4月中旬頃、事務局鳥越氏に送られてきたもので、その後彼からは、取扱いについては自由にとの電話もあったとのこと。会報にそのまま載せられるようまとめてありますし、こちらが作為的に打ち直したと勘繰られるのも迷惑なのでそのまま掲載しました。

(一応断っておきますが、これまでも事務局で握りつぶしたような原稿は一本もありません。「載せないで」の若干の返信はがきや、年賀状と返信を兼用されたらしきものを掲載したことはありますが…。)

編集者という有利な立場に立っての答弁は好むところではありませんが、半年毎に丁々発止をやるのも、それはそれで、昔の落書き帳みたいでおもしろいかもしれません。読みたくない人には読まない自由があるのだし…。ことなかれ主義やあたり障りなく主義より「まし」とも思うし…。

まず、飲み会帰り同士であった前田顧問と、久富さんの会話がどんな雰囲気で行われたか？それを今はワンゲルOB会というアホ(!)な仕事を一緒にやりながら「実は、以前飲み会の帰りに…」と話してくれた久富さんと私の間にどれだけの敵対関係があったとみなせるのか？ワンゲルOBなら、笑い話で読んでいるものと思っていました。

もちろん飲み会帰りの現場に私がいた訳ではないし、それを口にした久富さんの本意は何かとわざわざ問い質したはずもない…その程度の話。忙しい時間をどうにかやりくりしながらやっていることなのに、わざわざ何期に汚名を着せるために…どうして、そんな受け止め方をするのかな？45年の人生経験により「人は人の器なりに解釈するもの」として、こっぴどく同じ土俵に上がらんわ！でケリをつけたいけれど…。

昨年は戦後50年ということで、山岳誌にも戦御登山史の特集が組まれて、なかなか興味深い記述がありました。

若者が山から離れ出したのは、KUWVに限った現象ではありませんでした。どの大学でも山系統の部(組織やトレーニングを必要とするタイプの部)は新人確保に苦労していますし、社会人山岳会もそうです。部報や会報も発行されなくなり、ポラー形式も廃れていったことが、全体現象として特集の中に述べられていました。

KUWVの部員減もまさにそんな時流に乗ったことなのです。部の歴史をみると、「新2トレ」が「1、2年山行」と名称を変え、春山合宿がポラー形式からラッシュ形式に変わり、オープン登山がなくなり…それらは正確には、何期の、何主将の代の執行部が決めたことと確かめられるはずですが、むしろ時流がそうになっていたのです。決定の揺り戻しがなくそう踏襲されていったということは、その時代の現役の多数の心情にマッチしていた、その代がやらなくてもいづれそうなったに違いない…ことなのです。たえず新陳代謝している大学ワンゲル部の場合、時流は即反映されていくのです。

4年生が卒研に忙しく、就職活動に忙しいこと自体は変わっていないというか、単位制が変わった最近までは大きな変動はなかったし、この頃の就職氷河期、ダブルスクール時代と比べれば右上がり成長の時代に、急に不都合になったとも思えません。むしろ情動的に4年生執行部が受け入れられない時代になった…(このあたり、また言葉尻をつかまえての反論が出るんでしょうか…) よくも悪くもある種の年功序列的なものが消え出した象徴だと私は、「解析・考察」したのです。

3K…汚い、きつい、臭いの他に「組織」も敬遠されて、部員減となり、部員になった者の間でも「組織=命令される、拘束される」部分が、嫌われていったように見受けられます。こういうことは、社会現象として、多くのOBが職場でも体験されているのではないのでしょうか？



単なる「助言」「意見」が、「口出し」と取られ、二言目には「圧力をかけた」「干渉した」の言葉が返ってくる…いつの時代にも世代間ギャップはありました。それでも相手の立場を尊重する、相手の価値観にも一目おくといい良識はほどほどに働いていたと思う。「文化」そのものが、その積み重ねでやってきたはず…です。

そんな人間としての智慧プラス儒教思想の年功序列がひっくり返ったのが、何といても「終戦」。その後いくつかあった歴史の「トゲトゲ」部分のうちの一つは確かに「共通一次」で象徴されるはず。それはまさしく、21期山口さんが執行部の時代の1月のことでした。一大学の一ワングルにも、見事に世相が反映されている点非常におもしろいと思っています。

ですから「見直し」だの「改善だの」?? 新人勧誘をやって何人かが入った。本人達が入りたくて入った。誰も部のために入ってくる訳ではない。彼等の価値観で彼等のやりやすいように…、そうにしかならないし、そうやっていると思っています。

さらに「21期が決めた」などと…そういう表現そのものにも、私は時流を感じるのです。ではそれより上の人は何も感じなかったのか? 「20期が決めたかのようなコメント」との抗議ですが、20期は現役最上級生としての責任がありました。もちろん卒業間近の彼等は、現役の望む方向にと見守るしかなかったのですが、「部

をつぶさなくてよかった」の気持ちを洩らしてもあります。何か視線が上を見なくなった時代とといったものを私は感じてしまうのです。

また、OB数は現役時代の活動の実数を示すものではありません。例えば私の所属する15期は、新歓で71名、新トレでは42名いましたので、OB名簿の20名では状況がわかりません。発足の頃には1学年に100名近くが登録された期もありました。それで活動の実数を示す指標として夏合宿の参加者数を適当とし、これを35周年記念誌の上巻p.1-10に掲載しました。昭和35年からずっと60から80名代で前後し、久富さんの代の90名をピークに、減少が始まっています。

それが、21期の頃にあった事。それが丁度世相として若者が組織離れを始めた頃であったこと。その組織離れが、ワングル内部では、執行部が4回生から3回生へ変更という形で現れたらしいこと…以上が某女史の「解析・考察」で、久富さんにせまった理由でもありました。

そしてまた、彼が単に無人島への憧れだけで、あれを書いたのかといえ、やはり時流をもどかしい思いの中で見守るしかなかったOBの心が前提になければ、読みとれないものがあります。それで、「解説」も「コメント」もつけています。私が「解析・考察」の名の下、特定の期に汚名を着せたなど、それこそ濡れ衣です。

35周年記念誌のうちの上巻は、その時代の執行部がどう考えて部を運営していったかがわかるようまとめました。10周年誌では、OBになってからふり返っての時代の考察となっていました。私は現役時代の声そのままを再掲の方針にしました。現役のその当時にどう考えて運営していたのかの方に私は関心があり、読み手の各位にも、考察を加えないストレートのままを読んでほしかったのです。

議論髣髴の中で、部は運営されていきますし「組織」と「個」の根本的対立もずっと抱えこんでいます。でもどちらかと言えば「ワングルのなもの」はあまり変わっていない。かつては時流そのものがワングル的であり、時流に乗っ

てワンゲルも誕生しました。それが、時流の方が変わり、ワンゲルはむしろ時流とは逆行の価値観に存在することになりました。いつでも部は揺らぎ続けてきました。部がたまたま抱えた問題というよりは、時流と「ワンゲル的なもの」の軋みに喘ぎ続けてきたように眺めています。

最後に、あの、私がいへん評価している25周年後の「OB会設立運動」の時も、山口さんは、批判あるいは再考を促す文書を送ったと聞いています。「21期に汚名云々」ではなく、まずOB会そのものを山口さんは受け入れられないのではないのでしょうか。「記念山行の参加費が高い」とか、枝葉末節を細かく批判するより、OB会不用論か何か、もっと根本的な所で持論を展開していただけないのでしょうか。

原稿をお待ちします。

p59、60は、「自然人」NO.34
'96.1.1発行より



平成7年秋、犀川倉谷の山小屋で開催された「月見の宴」

役にもどうか伝わり始め、石川の山への関心も、少しずつ復活してきたようだ。二度となが青春に、石川の自然の美しさ豊かさを、是非重ねていつてほしいと願っている。

見が多かった。が、今の就職氷河期と同様に、受け入れ育てる体制も不足していた。しかし私の代に女子はサポーター隊に混じって参加し、その後ポラー方式がラッシュ方式に変わった時には共に頂上を踏むようになった。今は女子がリーダーとなって厳冬の甲斐駒に登っている。

この他にも、ワンゲル活動の啓蒙を意図したオープン登山がなくなったこと、山の歌が歌われなくなったこと、個人山行（部の承認をとらない）が容認されるようになったことなど、やはり世相の反映と思われる変遷が見られる。

しかしながらワンゲルの場合、今も、自分が一人前になり、もっと活動を広げたい時に、それをこらえて新人の育成に多くの時間を割いている。

付いていく山行と連れていく山行のギャップに悩み、リーダーの責務を果たして卒業していく。「人を愛し、自然を愛し」の創部以来の精神の方は、世代や変遷を超えてしっかりと受け継がれている。さて、引き続きOB会事務局長に横滑りした私はというと、子育て一段落の十一年前に金沢ナカオ山岳会に入会している。途中で三男誕生というハプニングもあったが、「社会性ある登山」「生涯登山」の会のスローガンに助けられ、配慮もいただいて山行を続けることができた。OB会のお世話もこのスローガンに沿ったものであり、少しでもお役に立っていききたいと思う。幸い、労をとわぬ気のいいOB仲間にも恵まれ、楽しく事務をさせてもらっている。

OB会発足と同時に、犀奥倉谷での山小屋修復も始まった。今秋は山小屋を利用しての「月見の宴」が開催され、多くのOBが高三郎山の麓で、懐かしい一夜を楽しんだ。

ちなみに、この高三郎のクラコシ尾根コースも、犀滝へ至るコースも、金大ワンゲルが拓いた道である。高三郎山と見越山の間の小高原はワンゲル平が通称とされている。山小屋と白山を結ぶ長大な尾根ルートは、金大ワンゲル究極のコースとされ、春と秋に八度の踏破が行われてきた。昨年は夏合宿に始めてこのルートが加わり、真夏のヤブ漕ぎを敢行した現役達には、OBからも感嘆の声と拍手が送られた。

県内の各界で活躍するOBの情報や経験が、現

ワングェル三十五周年に見る変遷とOB会

舟田節子 金沢大学ワングェル部OB会

金沢大学の角間キャンパスへの移転を契機に、金沢大学ワングェル部では、ようやくOB会が発足した。

実のところOB会は何度も発足しながら挫折を繰り返してきた。この機会を逃せば二度とOB会は作れないかもしれないという危機感により、今回はOBの七割強からの賛助金を集め、二割が参加する総会を開催し、年二回の会報発行を含む運営体制を整えることができた。

三十五周年記念誌は、その総会に先駆けて編集、発刊したものである。三十五年分、総五百名のOB相互の違和感を薄め、意識をより合わせる事が第一の目的であった。高邁な志に反して、仕事や家庭を持つOBには編集会議を持つこともままならない。結局独断と偏見で押し切って、総会に間に合わせた悔いが、編集長を務めた私には今も残っている。とはいえ、内容のほとんどは部が毎年発行してきた部誌ベルクハイムからの抜粋であり、各冊から二十ページ前後をコピーし、項別に配列し直す手法をとった点では、そこそこの公平さを保ち、その時代時代の現役の姿を反映できたのではないと思う。

戦後五十年の今年、歴史を振り返る企画がたけなわだが、一大学の一部活動にも世相は色濃く反映されている。毎年学生が交替していく点では、

過去をひきずることなく、その時代がすぐ飛び込んでくるといった印象がある。その変遷のいくつかを紹介したい。

金沢大学ワングェル部の発足は、昭和三十三年。平成天皇御成婚の前年にあたる。当時の学生会館にあたる尾山クラブの二階で、会津若松出身の二人が「我と来て、遊べや金の無いスズメ」と檄を飛ばしたのが始めと聞く。ユースホステル活動も隆盛を極めていた頃のこと、たちまち学内一の大世帯となった。今は、「汚い」「きつい」「臭い」の三Kの最先端を行く部として、新人勧誘にも苦戦し、往時の二分の一弱で低迷している。アウトドアがブームといっても、見掛けのいいサイクリング部などに人が流れてしまうのと、少ない部員に、部運営のための負担がさらにかかることになり、なかなか挽回は難しいようだ。発足の頃、服装はまちまち。帰省の度に秋葉原へ寄って米軍放出のシユラフを仕入れて来る者がいたり、はたまた炭俵をエアーマットがわりにしたり……。今、万年金欠にかわりはないらしいが、服装はファッショナブル、装備は最新式、部員の三分の一は車を所有といった環境にある。そんな現役達の山での食生活はとなると、肉と野菜をいためて煮た後、何になるかはそれから入れる〇〇の素次第……とかで、レトルトパックも

加わり始めている。フリーストライが出回り出した私（十五期）の頃は、財布も胃袋もそれでよしとせず、天麩羅や巻き寿司なども作られていた。その頃、突然昼食メニューに登場した耳パン（パンの耳の袋入り）は、日持ちがするのとタダ同然の値段で一世を風靡したものだった。さすがに人前で食べるのは躊躇され、雄大な景色を前にこそこそと食べねばならない屈辱は、右記の長所を圧倒し、今は消滅している。さらに昔の創世記となると、生きた鶏が食材に出てくる。自前で歩いてくれるし、新鮮さはいうまでもない。その廃鶏が、久々の外の空気に卵まで産み落としてくれた時、先輩方は命乞いをされているようで、彼女を絞める手が鈍ったという。

では活動山域はどうなっているかといえば、地元の山を離れる傾向が出ている。地味な山より、有名な山、恰好いい山へ行きたいという嗜好の変化が最大要因のようだ。地元の山では、まず医王山からは、かつての有料化で離れた。続くホームグラウンドとした犀川源流山域からは、小屋（昭和三十八年犀川ダム建設時に廃屋を解体し、倉谷の高山に建てたもの。現在は二代目）作業の衰退とともに離れていった。また春山合宿も、もともとは地元の山ゆえに積雪期のチャレンジも敢行するとされ（雪山は山岳部の領域であってワングェル的ではないの反論があった）、白山をめざして始められたものだが、今は雪が軽くアプローチも容易な後立山連峰に変わっている。

この雪山に関して、女子参加が拒否されていた時代がある。それまでも女子部員論は前述の部誌でも特集が組まれ、部員としての自覚を促す意

返信のアレコレ

(23期同期会通信より転載)

・浅輪 郁代 (8/9でOK)

中川君に電話したあとすぐにこのハガキが見つかりましたので、一応、正式に出します。
子供が2人増えるかもしれません。

→ 待ってるぞい!

・石地 隆司 (8/9はやや難)

10日が仕事なので、夜のみならOK
子供が4ヶ月なので、嫁さん・子供は無理かもしれない!

→ 幼児の参加も歓迎!
(最も、お父さんに似てなければ無理かも?)

・宇野 寿洋 (8/9はムズイ・・・)

南竜でテントしよう!
ボッカは私にまかせてくれ
体力に自信あり

→ 福井から日帰り出来っぞい!

・小久保 光将 (殆ど暇)

お世話になります。
体力に見合った子供と楽しめる企画を期待します。

→ 近くに、「恐竜館」、「手取川の河原」があり、
子供とも楽しめるぞ!
あとは、お父さんの体力次第だ!

・興井 隆 (8/9でOK)

私本人は、体力/気力共に充実しており、白山登山は可能ですが、次男が3才の由、南竜山荘泊りの可能性が大です。
御前山ロッジはどこにあるの?

→ パンフを同封したぞい!

・窪川 淳一 (8/9でOK)

いつも良くやって頂いて感謝しています。

→ これも、暇がなせるワザだ!

・小坂 陽克 (暇なし)

仕事の都合で、不可の可能性が大きいです、上記のとおりとしました。(今後の都合次第)
皆さんによろしくお伝え下さい。

→ たまには、暇しんかい!

・鈴木 康之 (ムズイ)

今年の夏休みに海外研修(ニューヨーク)を計画しているので、出れそうにありません。
皆さんによろしくお伝え下さい。

→ 国外出て、日本の恥さらすなヨ!

・高橋 智栄子 (8/9で、多分OK)

金沢衆のいつものきめ細かやかな行動に感心しております。
今回は金曜日ということで、私にとってちょっと苦しいのですが、何とかしたいと思っています。

→ ナリ(中川)は、相変わらずザッパです・・・

・竹内 勝信 (8/16がいい)

参加できるかどうかは未定ですが、子供も楽しめる会にして下さい!

→ あとは、おじさん達の体力次第です!

・辻 政孝 (8/16がいい)

16日なら参加できるかもしれない

→ 君の体力なら、夕方に駆けつけ、明朝出社も可能なハズでは?(愛知県から・・・)

・戸水 利紀 (8/9がOK)

買い出し、及び、その他準備、何でも承ります。

→ じゃ、南竜までの枕木ボッカ!

・中川 晃成 (8/9、16がOK)

すばやい準備ありがとうございます。
楽しみにしております。

→ 当日の買い出しの程、宜しく!
ところで、新居(4月引越)の案配はいかが?

・名倉 均 (いつでも暇)

ギョエー~~~~と!
もしかして、3人目できたかも・・・

・宮西 康之 (8/9がOK)

期待しております。
いろいろと御苦労ですが、よろしく願います。
ロッジの情報等あれば、送付いただきたい
参加メンバー(途中経過)を知らせて欲しい

→ 知らせるぞーい!

・村井 匠 (8/9がOK)

いつもお世話になっています。

→ 来年は、富山衆で宜しく!

・竹内 和彦 (8/9、16がOK) ← 21期

もしかしたら家族連れになるかも?

・桜井 俊一郎 (8/2、9がOK) ← 22期

勝山から白峰は近いので何か手伝う事があったら、連絡して下さい

→ では、子供受けを狙って、当日、勝山のカブト虫/クワガタを宜しく!

・坪井 陽典 (ムズイ)

← 24期

せっかく誘っていたいたのですが、7月ごろに長期に渡り仕事を休んでしまう関係で、8月は、ちょっと休みがとれない状況です。
8月24、25日は、24期の方がおり、これに行かないわけにはいきません。
非常に残念ですが、今回は行けそうにありません。

以上 アレコレでした!

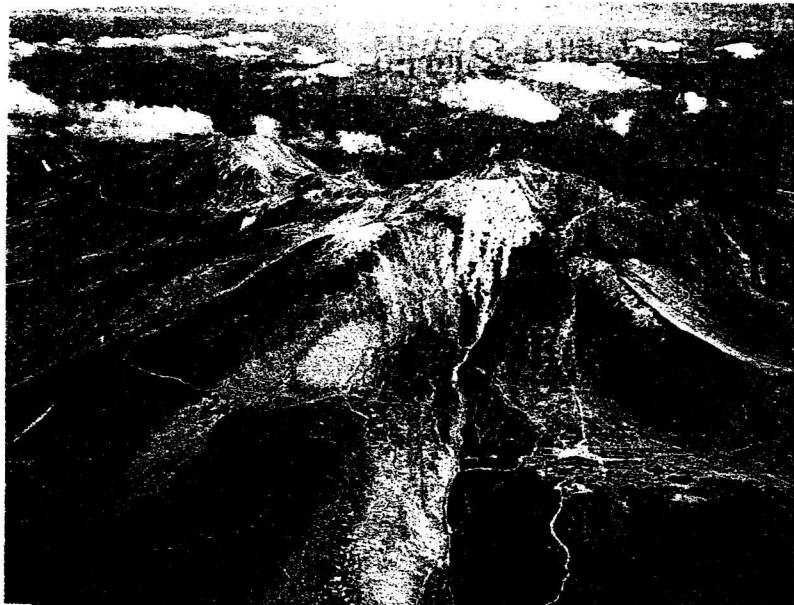
「環白山観光圏」を発信

石川、岐阜県共同で新年度から

富山、福井も協力

4県41市町村
エリアに設定
まず回廊ガイド

知事裁定500万円



周辺4県交流の「壁」となっていた白山。共同の観光資源としての活用が始まる＝本社ヘリ「まなづる」から

石川県は新年度から、岐阜県と共同、富山・福井両県と協力して、白山を中心とした四県にまたがる広域観光ルートを「環白山圏」と位置づけ、全国に発信する。白山ろくろの山岳景観、貴重な動植物、独特の山村文化など「自然と歴史」をテーマとした観光資源を、広域ドライブコースで有機的につなげ、観光客の動機づけを図る。初年度は、石川、岐阜両県で環白山広域観光推進委員会を組織し、その魅力を紹介する「白山回廊ガイド」を製作することとし、十四日の石川県当初予算案知事裁定で五百万円の計上が決まった。

石川、岐阜両県はこれまで、機性に恵まれ、恐竜化で、白山スノーランド、林道でつ石の分布、世界遺産の白山、なごりなが、直接交流は、郷・五箇山合掌造り集落、少なかつた。昨年二月に両県知事が初の懇談会を開き、広域観光ルートの形成を申し合わせ、交流の「壁」となっていた白山を観光資源として活用する検討が始まった。

石川県によると、気候風土、生活風習、信仰などの共通性、さらに国道8号、156号、157号、158号の各線を利用した回遊性から、四県の白山周辺四十一市町村を「環白山圏」に設定。推進委の事業には、富山、福井両県も協力することになった。

白山回廊ガイドには、多いと話している。

さらに、推進委は独特の白山文化と異文化の交流による国際音楽祭や滞在型セミナー、環境美化を核とする「エコリズム」の商品化なども企画している。石川県観光推進課は「観光客にとって県域は意味がない。一つの地域として、さらなる広域観光ルートの形成を目指していきたい」と話している。

新年度から都市公園整備

金沢城跡 112億円で取得

谷本知事発表

石川県は十五日、国有財産の金沢城跡二・七畧を、北陸財務局が提示した百十二億円で買い取る、と発表した。会見した谷本正憲知事は「県民が納得できる適正な価格」と述べた。本年度内に売買契約を交わし、新年度から都市公園として整備する。谷本知事はまた、同公園を主会場に平成十三年(二〇〇一年)度の誘致を目指す全国都市緑化フェアを機に「本格的に県民に開放したい」との意を受け、本年度三月補正に計

上する予定。残る三分の二についても、大半は元利償還に交付税措置のある有利な起債を活用し、谷本知事は「県民の負担にならないよう努力する」と強調。県が「昨年六月に策定した城跡整備計画は、埋蔵文化財調査、石垣の修復、公園の名称は「県民から募

う。県庁跡地との整合性も課題 石川県政の懸案だった金沢城跡取得がこの時期に終わったことは、バブル崩壊後の地価下落や国の二次補正に伴う財源確保という追い風があった。城跡の特殊性に配慮した北陸財務局の評価は例のない城跡鑑定に一つの目安をつくれたことで意味深い。谷本知事が表明した五年後の全面開放には、十九年計画の公園整備を前倒したい意向がにじみ出た。

白山の植物を保全

県種子保存に調査費



白山の貴重な高山植物を保全するため、新年度から始める種子保存事業。写真はハクサンコザクラ

石川県は十五日、白山の貴重な高山植物を保全するための種子保存調査事業費として、知事裁定中の新年度当初予算案に百五十万円を計上することを決めた。白山は、中部山岳地帯などとは離れた独立峰で、高山植物も狭い範囲にしか分布していないため、山火事などによる絶滅の可能性が高い。また、科学技術庁が過去三年間にわたり白山で進めた調査の結果、遺伝的

に白山特有の種がいくつもあることも分かった。そこで、ハクサンコザクラ、イウキキョウ、ガンコウランなど計二十種の高山植物を対象に、石川郡吉野谷村の県白山自然保護センターで種子の保存方法を調査・研究することにした。期間は平成十二年度までの五カ年。▽年五種ずつ現地で種子を採集し、生育地の現状も併せて調査▽温度や湿度などの条件を調べていく。県環境部は、これらの調査・研究を通じて種子の確実な保存方法をつかみ、将来的に高山帯の植生復元のための苗の供給体制を確立したいと考えた。

埋蔵文化財の調査状況次第で史跡公園化の要請が高まり、跡地活用が制限される可能性も否定できない。重要文化財の石川門、三千年長屋の維持、管理が県に委託され、兼六園同様に有料化するのか、無料かの判断も迫られる。もちろん、自然を守ることも忘れてはならない。歴史と自然、スポーツやイベント、相反する利用価値をどう考えていくか、県庁移転後跡地利用との整合性なども課題となる。(報道部 山本義之)

元復園庭丸院泉玉堀もい

金沢城址公園整備方針固まる

石川県は、金沢市の金沢城跡で本年度から始める「金沢城址(じょうし)公園」整備事業の主な方針を固めた。江戸初期に掘られた「いもり堀」(外堀)や、加賀藩主・前田利常が整備した「玉泉院丸庭園」など遺構の復元が、目玉。城跡に豊富に残る埋蔵文化財については、当面予備調査にとどめ、同公園を主会場に二〇〇一年(平成十三年)の開園を見込む全国都市緑化フェア後に本格着手する。

埋文は段階的調査

本格着手は2001年以降

総合公園として都市決定された金沢城公園は、金沢城が築かれたのとはほぼ同じ江戸初期に掘られた外堀(そとほり)公園七・八畧を合わせた二八・五畧。このうち四・二畧が、今後十年間の整備対象となる事業認可区域で、本年度は基本設計と旧金沢大校舎の撤去などが行われる。

埋文(うみぶん)は、復元されるいもり堀は、兼六園が金沢城の外堀に遺構があることが分かった。その位置付けに対し、同庭園は由緒正しい内庭だった。明時代に入ってから荒れ、旧陣地の馬場にもなっていた。復元までは庭園跡地に建つ県体育館の移転が課題となる。

一方、絵図や資料から、城跡には御殿や門の跡、加賀藩の行政施設跡など膨大な遺構が残っている。埋蔵文化財調査に取って代わる全国都市緑化フェアまでに終わることは不可能なため、段階的に進めることとした。

県は、同公園を「自然の歴史、文化財の保護・配慮し、緑と空間をいかした県民憩いの場」とする考え。植物園をいより堀、開放するほか、二の丸、三の丸、新丸跡を広場とするなど、構造物は休憩所や展望台にとめる方針だ。

